



| | |
|---------------------|---|
| Title | ハンガリーの映画監督ヤンチャー・ミクローシュの空間表象に関する研究 [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | Levente, Molnar |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(文学) |
| Dissertation Number | 甲第15117号 |
| Issue Date | 2022-06-30 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/86458 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Levente_Molnar_abstract.pdf, 論文内容の要旨 |



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：モルナール・レヴェンテ

学位論文題名

ハンガリーの映画監督ヤンチャー・ミクローシュの空間表象に関する研究

・本論文の観点と方法

本論文は、ハンガリー現代映画を代表する監督のひとりであるヤンチャー・ミクローシュの作品における空間表象について、ヨーロッパにおけるハンガリーの地政学的位置や 1960 - 70 年代のハンガリーの社会的文化的状況、ハンガリー映画の史的・時代的文脈に関連付けながら、映画学的視点を中心に据えて総合的考察を行ったものである。ここでいう「映画学的視点」は主として作中における映画空間の構築およびその変容に焦点を絞って検討することを指す。ミシェル・フーコーの「一望監視施設」（パノプティコン）をめぐる思想から着想を得た本論文は、ハンガリーの地理的特徴にもなる平原を物語の舞台に据える、「大平原映画」とも呼ばれるヤンチャーの作品群を組上に載せて、映画における空間の表象とそこにおける視線による権力の行使との関係性を作品ごとに分析してゆく。また、同時代における西ヨーロッパの現代映画の隆盛の流れの中にハンガリー現代映画の先駆ともされるヤンチャーの映画創作を置くという映画史的視点による検討も、本研究における論の展開の補助線をなしている。

・本論文の内容

本論文は序論につづく第 1 章から終章まで全 7 章から構成されている。終章も単にそれまでの内容をまとめたものではなく、本研究の作品論のさらなる展開が見られ、本研究の将来性を示すものである。以下、序論と各章の主たる内容をまとめる。

序論はヤンチャー監督の経歴を概観し、時期ごとにその映画制作の特徴を説明したうえで、多岐にわたるその映画・映像活動の実態に鑑み、ヤンチャー映画作品の分類を提案する。ここでは、とりわけ 1965-82 年に制作された、ハンガリーの地理的特徴にもなる大平原を舞台とする映画群（「大平原映画」）を主たる研究対象とする本論文の基本線を提示する。また、戦後ヨーロッパにおいて現れた現代的映画から影響を受けたヤンチャーの創作が、同時に当時のハンガリー国内の社会的・文化的状況にも深く関わるが、後者について序論では先行研究を挙げつつ説明する。

第 1 章は中央ヨーロッパに位置するハンガリーの、歴史的および地政学的中間性についての説明と議論から始まる。参加メンバーには国際的知名度の高いルカーチ・ジョルジュも含まれる、1960 年代にヤンチャーの自宅で催されたサロン、ヤンチャーの映画作家としての成長を語るに欠かせないバラージュ・ベーラ撮影所（BBS）など、ヤンチャーをめぐる環境を整理する。その上で本章はコヴァーチ・アンドラーシュ・バーリントを筆頭とする先行研究を検証しつつ、ミシェル・フーコーによるパノプティコンをめぐる諸論考に基づいて、映画における空間表象をめぐる考察と見えない権力の行使に関する分析を結びつける本論文の独自のアプローチおよびその根拠を明示する。このアプローチをとることによって、「大平原映画」と呼ばれる作品群のうち、1964-68 年に制作された、19-20 世紀前半のハンガリーおよび中央ヨーロッパにおける

権力行使の諸問題を前景化させる歴史映画の諸作品に焦点を絞って考察することをさらに説明する。

第2～6章は空間表象の考察を中心とする作品論を行う。

第2章は『僕はこのようにやって来た』の映画空間についての論考である。作品の各シーケンスを具体的に追いつつ、映画の演出と編集に目を向け、作中に提示された空間は権力行使の空間でもあることを分析する。また、捕虜となる作中人物が広々とした大平原の空間から脱出することが不可能であることを、ロング・ショットによる画面内の奥行きに関連付けて指摘する。

第3章はハンガリー現代映画だけでなく、戦後ヨーロッパの現代映画においても傑作のひとつとして挙げられる作品『密告の砦』に関する論考である。本作のナラティブにおける「パラボラ」話法の採用や映画撮影におけるロングテイクの多用にもっばら関心が集まる先行研究を押さえたうえで、本章は大平原という映画の空間を権力が全能的に行使される場であると見なし、装飾的空間、脱出不可能性、予測不可能性といった具体的な事象を取り上げつつ、国家権力とその現れとしての空間を分析する。そういった空間に関する考察は、大平原のなかで作られた「砦」がいかに「恐怖の劇場」へ変容するかについての分析を経て、人物の目線、カメラの視線、権力の監視を絡むまなざしの諸局面を究明するに至る。本作において「パノプティコン」的監視装置が典型的な形で作動していることが本章で確認される。

第4章では、『密告の砦』に次ぐ『星の者と兵士たち』の作品論が行なわれている。いわゆる「雪解け」期に唯一、ロシアとハンガリーの共同製作によって、ポリシェヴィキ革命勝利50周年記念作品として企画された本作をめぐって、本章はそういった製作背景、およびそれに由来する表現上の諸制限を確認し、映画の具体的場面に即して本作における独自の問題を見出していく。カメラ移動の多用や映画空間における視線の盲点、作中のダンスの持ちうる働きについて具体的に検討する。

第5章では、ワンショット＝ワンシーン構成を見せている長編劇映画である『静寂と叫び声』が、本論考の主題である空間表象の面から論じられる。「パノプティコン」的空間といえる諸要素が『静寂と叫び声』の中に凝縮されていると指摘する本章は、本作におけるナラティブと作中に挿入されるダンスの画面、およびシステム化した空間の問題を、具体的なショット分析を通して考察を重ね、あらゆる抵抗が排除される閉じた「パノプティコン」的空間が本作において典型的に表象されていると結論する。

第6章は、これまでの各章で取り扱ってきた大平原を舞台とする歴史映画の諸作と異なる、ヤンチャーの作風の転換を示してもいる『ザ・コンフロンテーション』を考察する作品論である。デヴィッド・ボードウェルによる先行研究を検討したうえで、本章では戦後ハンガリーで存在した「カレッジ」運動を描いた本作を長編二作目にあたる『カンタータ』と比較しつつ、作中に登場する青年たちの言動や振舞い、および映画がそれを捉えるときの表現の諸特徴に、閉じる「パノプティコン的」空間からの解放を見出す。

終章は前述各章の内容をまとめつつも、これまでの論述で捉える機会がなかった問題を取り上げ、本研究の展望を示す新たな問題提起を行なう。ここでは、『ザ・コンフロンテーション』以降の作品、および1964-68年制作の作品群に先立つ『カンタータ』について簡潔に記述し、ヤンチャー映画の現代性をめぐってドゥルーズ＝ガタリによって提起された「マイナー文学」の思索にリンクしながら、本研究のテーマに関する

今後の展望を孕む議論を重ねる。